

回復期脳血管障害患者と配偶者に対する家族機能改善をめざす 看護介入プログラムの開発

保健科学専攻

学生番号 D311702

氏名 梶谷みゆき

要旨

医療費抑制政策の中、在院日数短縮化や医療保険適用によるリハビリテーション期間の上限設定などがあり、脳血管障害患者と家族に対する退院支援や在宅療養支援の体系化は喫緊の課題である。

本研究の目的は、回復期リハビリテーション受療中の脳血管障害患者と配偶者を対象とする家族機能改善をめざす看護介入プログラムを開発することである。

本研究は、以下の4つのステップで展開した。

【研究1】家族看護介入研究の現状と家族機能を客観化するための尺度に関する文献概観を行った。【研究2】次に回復期脳血管障害患者と配偶者を対象としてFAD（Family Assessment Device）を用いて家族機能の現状を捉える実態調査を行った。【研究3】研究1と研究2を通して、回復期脳血管障害患者と配偶者の家族機能改善のために、「感情の安定化」と「現状認識の客観化」を図る計3回の看護師による面談を主軸とする看護介入プログラム（試案）を構築した。研究3では構築した看護介入プログラム（試案）を実際に2事例に展開し、実用性の確認と課題を整理した。【研究4】研究3で課題となったプログラムを修正し、研究4では、事例集積探索的研究、混合研究法を用いて本看護介入プログラムを展開し、患者と配偶者における家族機能の変化を確認した。FADによる量的な家族機能の評価とSCAT（Step for Coding and Theorization）による質的な分析を用いて、回復期脳血管障害患者と配偶者に対する看護介入プログラムの効果を測り、プログラムの有用性と課題を確認した。

【研究1】第1章は文献概観の結果、家族看護分野における研究は、疾病や発達課題などの一定の状況を持つ家族の特性を整理する研究や事例研究が多く展開されており、医療分野に探索を広げても介入研究の報告はわずかであった。家族機能に注視し、国内外で活用されている家族機能に関わる尺度とその信頼性について概観した結果、FADが最も活用頻度が高く、信頼性に加え臨床的な汎用性を確認できた。

【研究 2】第 2 章では研究 1 の結果から、FAD を用いて回復期脳血管障害患者と配偶者の家族機能の実態を調査した。7 つある FAD の下位尺度において、家族が外部からの刺激に対して適性に反応できているか否かを評価する「情緒的反応性」の機能低下が他に比し著しい ($p < .001$) ことが明らかになった。

【研究 3】第 3 章では研究 1 研究 2 の結果から、両者の「感情の安定化」と「現状認識の客観化」を図り、もって家族機能改善をめざす看護介入プログラム（試案）を構築し、2 事例に介入を試みた。FAD の「情緒的反応性」に関する家族機能は患者も配偶者も介入後に低下した。一方、配偶者の「意志疎通」の得点は改善し、また介入により夫婦の言動に肯定的な変化を認めた。目指した「感情の安定化」は FAD 上では「情緒的反応性」と「情緒的干渉」で改善を認めなかったため、介入初期の面談で夫婦の気持ちを丁寧に聴く時間を増やした。「現状認識の客観化」から一步踏み込んで「療養生活における目標の共有化」を目指すこととし、介入を強化した。

【研究 4】第 4 章では、研究 3 で試案を修正した看護介入プログラムを 9 事例に展開し、FAD を用いた量的データと SCAT による質的データを用いて混合研究法により評価した。結果、FAD の得点を、個人差や背景などの変数を組み込んだ統計モデルである一般化線形混合モデルを用いて、介入前後で比較したが、いずれの下位尺度においても有意差は認めなかった（統計ソフト SPSS Ver.26）。対象者の背景や FAD の結果から 4 事例を選択し、面談記録を SCAT を用いて分析し家族機能の変化を質的に評価した。感情の安定化や行動レベルでの変化などから家族機能の改善が認められた事例と、家族機能の改善傾向はあるものの変化に時間を要し十分な効果を確認できなかった事例があり、本プログラムの有効性と課題を確認した。なお後者の十分な効果を確認できなかった事例も、介入により最終面談時には療養生活に向けた課題の明確化ができていた。FAD を用いた家族機能評価では、9 事例という数量的な限界があり介入による有意差を確認することができなかった。本プログラムにより家族機能の良好な変化をしていても、夫婦がそれを認識できるまでに一定の期間を要すること、あるいは家族機能の変化を FAD のみで捉えるには限界がある可能性を推察した。本プログラムは、脳血管障害発症によって生じたそれぞれの否定的な感情や不安の言語化と双方のコミュニケーションの円滑化により、患者と配偶者の家族機能改善に寄与できると考える。一方、発症前から患者と配偶者の関係性が希薄な事例では十分な効果を得にくく、介入時期を早めるとともに面談の頻度を高める必要があることを確認した。

氏 名 : 梶谷 みゆき
学位の種類 : 博士 (保健学)
学位記番号 : 甲第保-31号
学位授与の日付 : 令和2年3月22日
学位授与の要件 : 学位規程第4条第3項該当 (課程博士)
学位論文題目 : 回復期脳血管障害患者と配偶者に対する家族機能改善をめざす看護介入プログラムの開発
論文審査委員 主査 : 京極 真 副査 : 平上二九三 副査 : 長町 榮子
<p>審査結果の要旨</p> <p>令和2年2月6日に実施の最終試験 (学位審査公開発表会) の後, 主査1名と副査2名で審査委員会を開催し, 博士論文の内容を厳密に審査した.</p> <p>I. 審査対象となった博士論文の題目 回復期脳血管障害患者と配偶者に対する家族機能改善をめざす看護介入プログラムの開発 【掲載論文】</p> <p>1. 梶谷みゆき (2018) 家族評価尺度を用いた家族研究の文献概観. 島根県立大学出雲キャンパス研究紀要, 第13巻, 121-131</p> <p>2. 梶谷みゆき (2019) 回復期脳血管障害患者と配偶者のFADを用いた家族機能評価, 日本医学看護学教育学会誌, 第28号No. 2, 29-34</p> <p>3. 梶谷みゆき, 古城幸子 (2018) 回復期脳血管障害患者と配偶者2事例に対する家族機能改善を図る看護介入, 日本医学看護学教育学会誌, 第26号No. 3, 32-39</p> <p>II. 審査結果</p> <p>以下の理由で, 全員一致で本研究が博士論文に相応すると判断した.</p> <p>1. 保健科学の学術的発展に寄与すると判断できる.</p> <p>2. 倫理的配慮が適切である.</p> <p>3. 査読付学術誌に論文が掲載されている.</p> <p>4. 研究の新規性と意義が明瞭である.</p> <p>5. 研究目的が明確であり, 先行研究の検討が十分行われている.</p> <p>6. 研究法は妥当に活用され, 手続きが明確である.</p> <p>7. 結果は明確であり, 適切に記載されている.</p> <p>8. 結果の解釈は論理的に飛躍しておらず, 十分に行われている.</p> <p>9. 考察は文献を適切に引用しながら深く展開している.</p>